

役割アイデンティティとパーソンフッドの達成
—ゴフマンに拠って“自己の構築”アプローチを再構成する—

関西大学 中河伸俊

社会学的探究を構築主義的に（つまりは社会学主義的に）一貫性のあるものとして押し進めていこうとすると、「自己」についての考察は、方法的プラットフォーム作りの重要なビルディング・ブロックの一つである。フロイディアンやミーディアンをはじめとして、これまでの社会学は“自己論”の供給に不自由してこなかったが、しかしそれらはいまだに、言語論（語用論）的転回以降の知の水準に応じた、豊かな経験的研究を生み出すに十分な苗床を形作っていないと報告者は考える。サククスが創唱した成員カテゴリー化分析は、相互行為場面における自己の現れ方の経験的研究にとってのブレイクスルーなのだが、それだけではまだ話の半分にすぎない。そこで、ゴフマンなのである。

従来の構築主義的自己論（ex. Holstein and Gubrium, *The Self We Live By*, 1999）の不十分さの「もっとも顕著な例」は、芦川によれば、『自己』と『パーソナル・アイデンティティ』を区別できない点にある」（芦川『自己』の『社会的構築』2017）。報告者はすでに、自己論を経験的探究により有効な形へと再定式化するための試行（中河「自己への相互行為論アプローチ」2010）の中で、自我（ego）と自己（self）を概念的に峻別する必要を説くとともに、社会学はその古典段階ですでに、(A)「表象としての自己」論、(B)「過程としての自己」論、(C)「関係の結節点としての自己」論という、「わたし」現象に関する三種類の社会学オリジナルの発想を提起していたと指摘した。アーヴィング・ゴフマンのレガシーは、この(A)と(B)の二つの系譜（デュルケミアンとミーディアン）を統合する地点に位置し、対面的状況における個人の人格（パーソンフッド）の相互行為的達成の理解に役立つ多彩な洞察を呈示しているという点で、いまだにその現代的意義を失っていない。

本報告では、ゴフマンの相互行為儀礼や、スティグマと“ふつう”の想定、役割距離、フレーム等々についての所説を手がかりにして、私たちが、さまざまな状況の中でその都度的に、個別かつ超状況的（trans-situational）なものとして取り扱われうるパーソンフッドを同定し構成する際に使う方法を探究するための、足場の整備を試みる。身体や見かけや固有名、種々の役割アイデンティティ、個人史情報や過去の相互行為におけるエピソード等々は、信者が「神殿に宿りたもう神」を思い描くのとある意味パラレルな、パーソンフッドの構築作業の主要な材料となる。そうした方法の理解のためには、実際の相互行為の分析だけでなく、ゴフマンが『行為と演技』で行ったような、「虚構」の作物を補助線に使うというマヌーバーにも再訪の値打ちがあるだろう。中河伸俊が、平賀源内が、初音ミクが存在する（した）とはどういうことなのか、それらのパーソンフッドの構築の手順と様態はどこが同じでどこが違うのかというのは、blank shot になる危険性を承知のうえで問うてみてよい問いだ。さらに、調査技法のレベルでは、ゴフマン流の考察を裏付けるデータを得る手だてとして、既存の諸技法に加えて、①日常場面における相互行為切片のフィールドノーツ作りと、②回顧的エスノグラフィーの二つの開発を提案したい。